

人権啓発コラム
バックナンバー集Ⅶ

心ひらいて

大分県広報誌
「新時代おおいた」連載

大分県では、県の広報誌「新時代おおい
た」に、その時々身近な人権問題につ
いて考えるコラム「心ひらいて」を連載して
います。

このたび、「2019年5・6月号」か
ら「2022年3・4月号」までの17編
をバックナンバー集Ⅶ「心ひらいて」とし
てまとめました。

皆様のご家庭、地域、職場で人権につ
いて考えるきっかけとして活用していただ
き、多くの皆さんの「人権への気づき」へ
つながり、一人ひとりが尊重される社会へ
の「築き」につながっていくことを心から
願っています。

2023年3月（令和5年3月）

大分県生活環境部

人権尊重・部落差別解消推進課長

タイトル一覧

- ・ダブルマイノリティー
- ・子どもの人権問題と私たちにできること
- ・ワールド・ピース・ゲーム
- ・正月を祝う木偶（人形）まわし
- ・大分国際車いすマラソンボランティアに参加して
- ・ドリアン・あん・きりん
- ・子どもの権利条約
（児童の権利に関する条約）
- ・ニュースとネットと人権と
- ・もののけ姫とハンセン病
- ・帝釈天と阿修羅
- ・迷惑をかけること・かけられること
- ・発達障がいを知っていますか
- ・誰もが自分らしく
- ・気づくことからはじめよう
- ・それぞれのあり方を考える
- ・ありのままを見つめて
- ・どんなときでも味方でいたい

「ダブルマイノリティー」

「虹色の朝が来るまで」という映画を観ました。若い女性二人が主人公で、「好きだから一緒に幸せになりたい」という願いを、同性同士だからと親から反対され辛い思いをします。しかし、同じ悩みを持つ当事者や支援してくれる理解者と知り合ったことで、自分らしく生きることの自信を得て、二人で幸せになろうと決意するという内容です。明るくきれいな映像がとても印象的でした。

この映画の特徴は、出演者のほとんどがろう者で、全編手話と字幕で構成されている事です。映画を制作した今井ミカ監督もろう者であり、性的少数者です。自身も悩み、苦しんだ経験から「ろう者とLGBTQ」、いわゆる「ダブルマイノリティー」を題材にしています。監督は「この映画を通して『少数者の中の少数者』の生きづらさや閉塞感を知って欲しい。また、性の多様性に関する悩みは、障がいの有無とは関係ないことに気づいてもらいたい。」と語っていました。

監督は今、「いろいろな性、いろいろな生き方～ろう者100人の手話メッセージ～」の制作に取り組んでいます。これは、次世代の子どもたちへのメッセージです。今後も、元気で笑顔が素敵な今井監督の映像による情報発信に注目です。

「子どもの人権問題と私たちにできること」

近年、子どもの貧困が問題となっています。厚生労働省の調査（H27）によると日本の子どもの貧困率は13.9%で、実に7人に1人の子どもが貧困状態だと言われています。

最近話題となっている「こどもしょくどう」という映画があります。この映画は、とある食堂を舞台に子どもの目線から貧困問題を描いた作品です。主人公は小学生の男の子で、食堂を営む両親と妹と健やかな生活を送っています。ある日、河原で父親と車上生活をしている姉妹と出会います。主人公は、姉妹を家に招き、夕食をごちそうするなどし、手助けできないか自分で考え行動します。姉妹の父親が失踪し、意外な展開へ。（公式HPより）

私自身この映画を見て、貧困に苦しむ姉妹の姿に胸が痛みました。また、いざ目の前に困っている人がいたら主人公のように実際に行動できるかと考えさせられました。これは、映画の中だけではなく私たちにとっても身近な問題です。

昨年大分県が実施した「人権に関する県民意識調査」では、「子どもの人権に関してどのような問題があると思うか」という質問（複数回答可）に対して、41.4%の方が「家庭の経済状況で自己実現できないこと」と回答しています。

社会には貧困だけではなく様々な理由で困っている子どもが多くいますが、この映画は自分に何ができるか考え行動する勇気をもらえる作品だと感じました。

「ワールド・ピース・ゲーム」 年・月号

いよいよラグビーワールドカップ開幕ですね。“ワールド”つながりで「WORLD PEACE GAME」を紹介します。

これは、ジョン・ハンターという教育者が考案した「世界を平和にするゲーム」で、仮想4カ国に分かれた25～35人のプレイヤーが、国家の首相や大臣、世界銀行や国連、独自の文化を持った少数民族や気象の神などの役割を与えられ、数々の危機を乗り越え世界を救うよう行動します。

対立する「敵」を排除して自分が勝てばいい、というゲームではありません。役割を与えられた「みんな」がプレイヤーで、「みんな」はそれぞれ「世界の一部」だからです。

プレイヤーは子どもたち。制限時間内に全ての課題を解決し、全ての国の資産を増やすことができるのか？戦争を企てたり条約案を練り上げたりしながら、子どもたちが世界救済に奔走します。

もしあなたが戦車や空軍を動かせる「貧困国の防衛大臣」という立場を与えられたとしたら、世界を平和に導くことが出来るでしょうか？ジョン・ハンターが紹介する「9歳の防衛大臣」のエピソードはインターネットで見ることができます。

立場や絶望を超えて、世界を平和に導いた子どもたちはたくさんいます。子どもたちの情熱や知恵に触れて、私たちの住む世界に眼差しを向けると、違った未来が見えるかもしれません。

「正月を祝う木偶（人形）まわし」年・月号

今年8月に開催した「県民講座」では、徳島県内の被差別民衆文化の調査研究に取り組む芝原生活文化研究所代表の辻本一英さんをお呼びして、講演とともに、「三番叟(さんばそう)まわし」や「エビスまわし」などの門付芸(かどづけげい)と、「傾城阿波(けいせいあわ)の鳴門」や「絵本太功記」などの人形浄瑠璃を実演していただきました。

特に「三番叟まわし」は木偶（人形）の入った箱を担ぎ家々を回り、家内安全や五穀豊穰を祈り、正月を祝い福を運ぶ、被差別民衆の中で育まれた伝統芸能です。300年の歴史があり過去には多くの芸人がいましたが、1960年代以降ほとんどその姿を見ることがなくなりました。その原因として「戦争」や「高度経済成長」に加え、「被差別地域に対する偏見」があるといわれています。

祝福の芸をすること＝出自を明かすこととなり、いわれなき部落差別を受けたことが大きな原因で、差別を恐れるが故に姿を消さざるをえなかったとお話されました。

一方で、今は日本の代表的な伝統芸能とされる歌舞伎や狂言、能、文楽なども、その発祥は被差別民衆の文化にあるといわれています。人形つかいの操る三番叟が新年を言祝ぎ舞う姿を見て、「偏見のない心」が次世代に残さなければならぬ伝統文化を守り、社会を豊かにしていくのだと思いました。

「大分国際車いすマラソンボランティアに参加して」

令和元年11月17日（日）に開催された第39回大分国際車いすマラソンの大会運営ボランティアに参加しました。沿道では多くの方々が声援を送り、海外の国旗を振りながら応援する人も見られ、その中を駆け抜ける世界トップクラスの選手達のスピードや迫力、ひたむきに走って行く姿に圧倒されました。今までテレビで観戦していたものを、実際に間近に見ることで、障がい者スポーツの楽しさや素晴らしさを体感することができました。そして、障がいの程度や年齢にかかわらず、全ての選手がこの大会に向けて練習し、レースに挑んでいることをひしひしと感じ、何事にもチャレンジし努力することの大切さを学ぶことができました。

市街地を見渡してみました。以前は「車いすマラソンのときだけは街が美しい」という声をよく聞いたそうです。日頃は点字ブロックをまたいで止められた多くの自転車がその時期だけなくなるということです。

今はどうでしょうか。自転車が歩道を塞いでいる景色はあまり見なくなりました。駐輪場や歩道の整備が進み、スポーツを通じ障がい者への理解が進むにつれて、バリアフリーが人々の心の中にも広がっているんだなと感じました。

「ドリアン・あん・きりん」

映画好き、読書好きの方はピンときたかもしれませんね。ドリアン助川さんが書いた小説をもとに制作され、樹木希林さんが主演した映画『あん』を観ました。

どら焼き屋の雇われ店長・千太郎、常連客の女子中学生・ワカナ、そして、どら焼き屋でのバイトを切望する突然現れたハンセン病元患者・徳江の3人を中心に、ハンセン病に対する、いまだに残る社会の偏見や知識不足、そして長い間自由を奪われ続けた徳江の孤独や悲しみに焦点を当てています。

原作者のドリアン助川さんにはずっと、「社会の役に立たないと生きている意味がないのか？」という疑問があったそうです。1996年に「らい予防法」が廃止され、ハンセン病の当事者たちが、治ったあとも隔離されていたことなどをマスコミが伝え始めたときに、その答えを、“人間として生まれてきたことの意味”“生きることの意味”を、ハンセン病をテーマにして書いてみようと思われ、小説『あん』が生まれました。

“生きていく痛み”をユーモアと優しさで包み込むような徳江さん。徳江さんは「ただ生きるだけで意味はあるのだ」と語ります。

次のお休みに『あん』を味わってみてはいかがでしょうか。きっとどら焼きが食べたくなりますよ。

「子どもの権利条約（児童の権利に関する条約）」

子ども（18歳未満の児童）は様々な権利を持ちます。「全ての子どもの命が守られる、生きる権利」「いきいきと学んだり遊んだりできる、教育を受け育つ権利」「虐待・暴力や有害な労働から、守られる権利」「自由に意見を表したり、団体を作ったりできる、参加する権利」等です。

すべての子どもたちが一人の人間として認められ、その成長過程で必要な保護や配慮、支援が受けられるよう「子どもの権利条約」に定められています。この条約は1989年に国連で採択、日本では1994年に批准され、以来、子どもの権利擁護にむけ、国内外で様々な取組みが行われてきました。

しかし、まだ世界では年間530万人の子どもが、病気や貧困による栄養不足などにより5歳までに命を落としています（ユニセフ報告2019）。日本でも学校などでのいじめ問題や、痛ましい虐待のニュースが数多く報じられるなど、権利が十分に守られているとはいえない状況にあります。

子どもの人権が尊重される「平和で安全な社会」を創るために、子どもにとって何が最もよいことを考えることが大切です。そして、今直面している問題や課題を子どもたちの未来に先送りしないことが、私たち大人の責務ではないでしょうか。

「ニュースとネットと人権と」

毎日、テレビや新聞で、痛ましい事件から心温まる出来事まで、様々な報道がなされています。そして、インターネット上では、マスメディアのニュースサイトだけでなく、世界中の人が、様々な経路で入手した情報や自分の考えなどをそれぞれ発信しています。

『人権』の定義を広く『人間らしく生きる権利』とするなら、これらのニュースには必ず『人権』的な視点があり、ニュースに対する様々なコメントを見るたび「たくさんの方が『人権』について発信しているなあ」と感じています。

今年は、「新型コロナウイルス感染症にまつわる差別や誹謗中傷」、著名人の死亡をきっかけに規制への議論が高まった「インターネットを悪用した人権侵害」などが、多くの人が見聞きし、発信している人権課題だと言えますが、皆さんはどのような思いや考えをお持ちでしょうか。

多様な立場から様々な意見があると思いますが、何はともあれ、「情報を読み解く力（メディアリテラシー）」と「伝える力（コミュニケーション力ほか）」とともに、差別的な言動をしない『人権力』も磨いて、日々の困難を助け合いながら乗り越えていけたらなあと思う今日この頃です。

「もののけ姫とハンセン病」

1997年に公開されたジブリ作品「もののけ姫」が、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言解除後の6月から映画館で再上映され話題となりました。

「もののけ姫」にはハンセン病患者と思われる方々が描かれています。物語の中では、たたら場と呼ばれる製鉄所で、包帯姿の人が周りから隔離されたところで仕事を与えられ、病と闘いながらも懸命に働いています。宮崎駿監督も、ある講演の中で、ハンセン病療養所を訪れた経験から「ハンセン病患者の生きる姿を伝えようとこのような場面を描いた」と話したそうです。

ハンセン病は、「らい菌」と呼ばれる細菌による感染症で、感染力は非常に弱く、日常生活で感染することはありません。また遺伝することもなく、現在では早期発見、早期治療により完治します。しかし、当時は誤った強制隔離政策により、人々の心の中にハンセン病は怖い病気であるというイメージが植え付けられ、差別や偏見を助長していきました。

現在でも新型コロナウイルスの感染が拡大する中、感染への不安から不当な差別や感染した方への誹謗・中傷が報告されています。ハンセン病の歴史を学んで、差別や偏見のないよう今後にかかしていかなければいけません。

「帝釈天(たいしゃくてん)と阿修羅(あしゅら)」

新型コロナウイルス感染症の感染者や店舗などへの誹謗中傷や嫌がらせ、ネットの書き込み等が連日マスコミで報じられています。自粛警察といわれる行動によって傷ついたり、誹謗中傷を恐れて受診をためらう人もいると思います。

「正義」について、こんな話があります。

昔々の話。「正義」の神である阿修羅と、「力」の神である帝釈天がいました。ある日、帝釈天が阿修羅の娘に一目惚れして無理矢理連れ去ってしまいます。怒った阿修羅は帝釈天に闘いを挑みますが、何度も敗れてしまいます。そんな中、一度だけ帝釈天が劣勢となったことがありました。逃げる最中、蟻の行列を前にした帝釈天は踏み潰すことができず引き返します。

もし、阿修羅であれば、蟻の行列を踏み潰して進んだでしょう。自分の正義を貫くために、蟻を犠牲にするのが「正義」の神、阿修羅だったのです。意外な感じがしますよね。正義にはそういった局面もあるというお話です。

新型コロナウイルス感染症に感染したい人などいません。他の人を傷つけることなく、感染を拡大させないために何が必要なのか？冷静に考えてみませんか。

ちなみに、阿修羅の娘は帝釈天と幸せに暮らしたそうですよ。父親としては耳の痛い話です。

「迷惑をかけること・かけられること」

試しにインターネットで「インド 迷惑」と入力して検索してみてください。このようなことが書かれている記事がたくさん投稿されています。『日本では「迷惑をかけないように」と教えられるが、インドでは「迷惑をかけて生きているのだから、他人（の迷惑）も許しなさい」と教えられる』。出典にはたどり着けませんでした。自分の心持ちや視点、考え方を変えるには十分なインパクトのある言葉でした。

例えば病気になったとき。例えば障がいが生じたとき。例えばなんらかの生きづらさを抱えている時……より多くの人を借りなければ、日々の生活すらままならないことがあります。コロナ禍の中、感染したら？感染した人をサポートする立場になったら？自分や家族が障がい者だったら？何かの特性や事情があって、それが生きづらさにつながっているとしたら？

「迷惑をかけないでください」と言われる社会では、なかなか「力を貸して下さい」とは言えないもの。『迷惑をかけること・かけられることを許し、自分に出来ることをする』……共生社会のヒントがあるように感じられます。

「お互いを理解する」だけでも救われることはたくさんあるのではないのでしょうか。

人は一人では生きられないのだから。

「発達障がいを知っていますか」

近頃、テレビや新聞などで「発達障がい」が取り上げられ関心が高まっています。

発達障がいとは、どのようなものなのでしょうか。発達障がいはいくつかのタイプに分類されており、自閉症、アスペルガー症候群、注意欠如・多動性障がい（ADHD）、学習障がい、チック障がい、吃音（症）などが含まれます。これらは、生まれつき脳の一部の機能に障がいがあるという点が共通しています。同じ人に、いくつかのタイプの発達障がいがあることも珍しくなく、個人差がとても大きいという点が、発達障がいの特徴ともいわれています。

最近では、様々な分野で活躍する有名人の方が発達障がいであることを公表したことで注目されています。タレントの栗原類さんは、発達障がいを公表しており、人とのコミュニケーションや記憶がうまくできないという特徴があるそうですが、自分の特性と向き合いながらモデルや俳優など幅広い分野で活躍されています。タレントのミッツ・マングローブさんは学習障がいを公表しています。文字情報を覚えることが難しいため絵やイメージに変換することで暗記し、慶應義塾大学を卒業され、テレビでも活躍されています。

誰もが自分の特性を生かし、活躍できる社会をつくるためには、社会の中で発達障がいについての理解をより深めていくことが大切です。

「誰もが自分らしく」

交通機関に、高齢の夫婦が乗ってきて、一つ空いた席に妻を座らせ、夫は立っていました。横に座っていた若者が席を譲ろうとすると「ありがとう、でも横に座ると妻の顔が見れなくなるから」と断られました。妻は恥ずかしそうにしていたけど、夫はそう言って立ったままだったそうです。

現在80代の方は、成人するまでは戦争など苦勞が多く楽しみの少ない青春だったと思います。成人してからも高度経済成長のなか、激動する社会に追われて働き続けながら、現在の社会を創ってきたのです。超高齢化社会の中で、最近では長生きすることがまるで「害」であるかのように、「老害」という言葉も耳にします。年を経れば誰もがたどり着く先が「老害」といわれることがあってはならないと思います。これまで培ってきた豊富な経験を基に、続く世代のアドバイザーとして、いつまでも元気であってもらいたいものです。

近年、高齢者や女性、子ども、障がいのある人など、さまざまな人が社会の構成員となるソーシャルインクルージョン（社会的包摂）の理念が求められています。「今時そんな考えは時代遅れ・・・」だなんて思わず、人生の先輩の言葉として耳を傾けてみませんか。

「気づくことからはじめよう」

先日トランスジェンダー（※）のAさんとお話しする機会がありました。

女性として育てられたAさんは、小学校低学年の頃から言葉遣いやふるまいが他の女子とは違うと感じはじめ、周囲が自分の性に違和感なく過ごす中で「自分は周りとは違う」と、様々な場面で生きづらさを感じてきたそうです。Aさんは「どうして男か女、どちらかでないダメなんだろう、一人の人間としてみてほしい」と心から言っていました。すごく自然体で寛容性あふれるAさんを目の前にすると、私も、「そうか、何も構えることはない、そのままがいいんだ」と気づかされました。私にとって性別のくくりは関係なく、「Aさん」でした。

先日の東京オリンピックでは、五輪史上初めてトランスジェンダーの選手が出場し、またスポーツ選手や芸能人には性的マイノリティであることを公表する方も増えてきました。しかし、まだまだ「LGBTって最近よく聞くけど、自分の周りにはいないよね」と思っている方が多いのではないのでしょうか。「いない」のではなく、「気づいていない」だけ、なのかもしれません。自分がその立場だったら困ることはないかな？と自分事として考えるだけでも、性的マイノリティの方をはじめ、誰もが自分らしく生きることができる社会に近づくのではないのでしょうか。

※トランスジェンダーとは、性的マイノリティの総称の1つである「LGBT」のうち「T」で表わされる「出生時に割り当てられた性別と異なる性別で生きる人、生きることが望む人」のことです。

「それぞれのあり方を考える」

「好きな男性の名字に自分の下の名前をつなげる妄想をしたことがある人はいますか？」

女子大に在学中、発表の授業で学生にこう質問したことがあります。すると30人程度いた教室でちらほら手が上がりました。一方「自分の名字に好きな男性の下の名前をつなげたことは？」と聞くと、誰の手も上がりませんでした。

民法は「夫婦は、婚姻の際に定めるところに従い、夫又は妻の氏を称する」（750条）と定めていますが、婚姻した夫婦の約96%が男性側の姓を使っています。

婚姻による姓の変更により、新たな人生が始まったような喜びを感じるという意見や、はたまた自己喪失感を持つという考え方もあります。

一方でお互いが自分の名字を大切にしたい等の理由から、婚姻後も通称使用をする人や、法律婚ではなく事実婚の立場をとる人もいます。また、選択的夫婦別姓について長年議論されており、内閣府が行った世論調査では若年層を中心に賛成・容認派が多くなっています。

自分の名字が好き、相手と同じ名字になりたい、様々な人がいると思います。人生を共にしたいと思うパートナーと出会ったとき、お互いが納得するまで話し合い、自分たちのあり方について一緒に考えていくことが大切ではないでしょうか。

「ありのままを見つめて」

人生における大きなイベントとしては、就職そして結婚でしょうか。コロナ禍で入社式や結婚式のあり方もずいぶん様変わりしてきましたが、新たな人生のスタートに立つ、若人の笑顔と希望に満ちた顔を見ていると「がんばれ！」とエールを送りたくなります。

婚姻は憲法24条にもあるように、基本的に双方の合意に基づいて成立するものです。しかし、本人や家族の住んでいるところ・出身地、国籍、性別など自らではどうすることもできないことを理由として結婚に反対されたり、婚約を破棄されることがあります。

子の意思を尊重し、選んだ相手を信じて二人の幸せを願わない親はいないでしょう。そこに“古くからの因習”や“イエ意識”などによる“世間体”といった観念が絡むことで、人としての本質が見えにくくなります。自らの思い込みで社会や世間をせばめてはいませんか。偏見や思い込みにとらわれず、ありのままを見つめようとする心が大切です。

お互いの自由な意思で人生のパートナーを選び、周囲の人たちの祝福を受けて新たな生活を始めることは、人として大切な権利です。当人だけでなく周りを取り巻く私たちみんなで、ありのままを受け入れ誰もが幸せに暮らせる社会にしていきませんか。

年頃の子を持つ親として、そんなときがきたら笑顔で背中を押してあげようと思います。

「どんなときでも味方でいたい」

皆さん日々生きていく中で様々な悩みを抱えることがあると思います。でも、子どもの悩みに直面すると自分のことは吹っ飛んでしまう、という親も多いのではないのでしょうか。

私も、子どもの学校での人間関係に悩んだことがあります。何もできずに見守っているうちに子どもたち同士で解決したのですが、子どもとの関わり方について考えさせられました。

オーストリアの精神科医アルフレッド・アドラーは、著書「叱らない子育て」の中で、「親子のよい関係を築くためには、子どもを尊敬し、ありのままを受け入れることが大切で、どんなときでも信頼してくれる親は、子どもにとって力強い仲間になる」といっています。

いじめられてるなんて恥ずかしくて相談できない、とか、男の子は弱音を吐いちゃいけないんだ、などと思ってしまう子もいるという話を聞きます。

私は、日頃から「どんなときでも味方だよ」というサインを送り、子どもを信頼して見守ることができる親になりたいと思います。そして、しんどい時に相談してくれたなら、弱さを隠さず話してくれたことに「ありがとう」と言いたいのです。そんな関わりが、子どもがいじめの被害者にも加害者にもならないことにつながるよう願っています。